

あてめ  
文章を正しく読み取ろう

次の文章は、杉みき子さんが書いた『ゆず』という物語です。読んで、あとの各問いに答えましょう。

雪のしんしんとふる夜道を、少女は歩いてた。

かなりの積雪をふみ固めた道は、家々のまどを見下ろすほどに高い。雪の底にしずんでいる小さな果物の灯が、その辺り一面をあわいオレンジ色にそめている。

小路を曲がろうとして、少女はふと足を止めた。ふる雪がそこだけくつきりとうき出して見える街灯の下に、おぼつかないにたすむ人かげがある。近づいてみると、それは角巻きをすっぽりかぶったおばあさんで、少女を見ると救われたように声を立てた。

きいてみると、初めてたすねる親類の家をさがしているのだと言う。少女はちょっと考えて、二つ先の小路にその名の表札をかけた家があったのを思い出した。

雪の積もった町では、辺りのたたずまいが一変して、道に慣れた者でもふと方角を失うことがある。たださえ足もとのあぶなげな年寄りに、そこと教えただけでは心もとなく、少女は引き返して案内に立った。

「道が細いから、気をつけてね。」  
声をかけながらふり返ると、老女は早くも、だれかのふみこんだくつあとのあなにつまずいて、よろめくはずみに手に持ったふろしきがほどけたらしい。さっきの果物屋で買ったとみえる大きなゆすが二つ三つ、雪道に転げた。

少女が急いで拾い上げ、ふるしきへ返そうとすると、いったん受け取りかけたおばあさんは、何を思ったか、ふと手を止めてつぶやいた。

「悪いけど、そこまで持ってってくんなんないかね。おら、手のはじかんで……。」

少女は言われるままに、そのゆずを両手にだいて、先に立った。

細かい雪がアノラックのフードにふりかかかって、おくれ毛につゆをつくる。めざす小路はだれも通らないとみえ、もう細い道のあとさえ消えかかっている。少女は長くつを小きざみにふみしめながら、老人の歩みを先導しなければならなかった。

やっと、たすねる家の表札を門灯の明かりで確かめて、手ぶくろのままいつの間にかにぎりしめていたゆずを返すと、おばあさんは何度も頭を下げて、受け取りながらつぶやいた。

「お礼とも言わんねえようなお礼だとも……。」  
みょうなことを、と思ったが、少女は気にもとめず、人に親切にした後のほのかな満足をだいて家へ急いだ。

明るくなる日がくると、雪が晴れて、美しい星月夜になった。いてついた道が、一步一步に、ガラスをふむような音を立てる。しんしんと冷えてくる夜気に、少女は道を急ぎながら、思わず手ぶくろの手で口の辺りをおおった。

そのとたん、ふいに、すがすがしいかおりが顔の前をかすめた。

「あ、ゆずのにおい。」  
少女は立ち止まって、もう一度、手ぶくろをかざしてみた。きりきりと冷たい夜の空気の中を、ゆずのかおりはそこはかとなくただよって消える。思い切り息をすいこみ、少女はその時はじめて、あのおばあさんの感謝の言葉を思い出した。

「そうか、これがあのおばあさんのお礼だったのね。」

少女は、宝石でもささげるように、手ぶくろの手を星空に高くかざした。

進路・夢の実現に向けて、この一問をクリアしよう！

一 おばあさんと別れて家へ急ぐ少女の心情を、文章中から十五字で書きぬきましょう。

二 「お礼とも言わんねえようなお礼」とあります。この「お礼」のために、おばあさんは少女に何をさせましたか。おばあさんが少女にさせた意図が分かるように、三十字以上、四十字以内で説明しましょう。

振り返り	二	一